

○つひの世の煙りの種となら柴の

まがらぬ杖をたれのこしつゝ

㊦ 文政版発句集

㊦ 句稿消息、「曲らぬ枝をたき残しつゝ」。

○手をそらし／＼つゝ活ばなの

花の身ぶりを仕るかな

㊦ 我春集

㊦ 我春集、前書「狂歌」。「いけ花のはなの身ぶりを仕る哉」。

時鳥さのみな鳴そ作るべき

田はさら／＼に持ぬ庵ぞ

㊦ 株番

㊦ 「子規さのみ」「もたぬ庵ぞ」。七番日記（文化9・4）、「さのみなげきそ」「もたぬ庵〔ぞ〕」。

奥 付（裏表紙見返し）

今井彦右衛門輯

嘉永元戊申歳新鐫

十軒店

江戸書林

英 大 助

通式丁目

山城屋佐兵衛

善光寺大門通

信州書林

蔦屋 伴五郎

功成身退といふ事を

○里ぐを涼しくなして夕立の

光りしりぞく山の外かな

㊤ だん袋

㊤ だん袋、前書「功成身退天道」。文政句帳(文政6・10)、三句以

下「夕立はなりしりぞきし山の外哉」。文政九・十年句帳写、四句

以下「み山がくれにゆくひかり哉」。

○七夕の人見給はむさし野の

草葉のむしとおぼしめすらん

㊤ 文政版発句集

念彼観音力

○稻の穂よ南無稻の穂よく

かゝるみのりの秋はあらじな

㊤ 文政版発句集

○行雲の跡からはげる青空へ

うそを月夜のむら時雨哉

㊤ 句稿消息

㊤ 七番日記(文化13・3)、二句・三句「迹よりはげる青空に」。五

句「一しぐれ哉」。

○木曾おろし雲吹尽す青空の

はづれにけぶる浅間山かな

㊤ だん袋

㊤ 五句「浅間山哉」。

○こちあちの風のまにぐ吹ばとぶ

塵の身にさへせはしなの世や

㊤ 文政版発句集

㊤ 文政句帳(文政6・6)、「こちあち風のまにぐ吹けばとぶ塵の身一ッふり安哉」「こちあち風のまにぐ吹け「ば」とぶ塵の身さへもせはしなの世や」。

○いくばくのなげきこりつむ小車の

下り坂なる我齢かな

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息

㊤ 七番日記、五句「よはひ哉」。

みちのくへたつとて

○ながらへば帰らん事もしら川の

関を越行老の身なれば

㊤ 文政版発句集

㊤ 八番日記(文政2・6)、前書なし初句「ながらへて」。四句以下「関をはるぐ越る身なれば」。おらが春(第四話上白)、「天哉子ノ迹ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌ」と前書して、初句「ながらへて帰らんことも白川の関をはるぐ越る身なれば」。

○追風にうしろ任せてあみだ笠

おのづと西へ吹れゆくなり

㊤ 文路あて書簡(文政6・4・3付)

㊤ 書簡、初句「おひ風に」。五句「吹れ行くなり」。八番日記(文政2・12)、前書「念仏坊」。「追風や後ろめたくも阿みだ笠おのづと西へ吹れ行也」。文政句帳(文政5・2)、四句以下「おのれと西へ吹れ行く也」。

㊤ 七番日記、上五「仏」とも。
牧人七十賀

○きゝ給へ竹の雀もちよくと

㊤ 文政版発句集

琵琶湖

○亀殿のいくつのとしぞ不二の山

㊤ 七番日記(文化9・2)・株番・稿本発句題叢

㊤ 七番日記、前書なし。上五「亀どのゝ」。株番、「題鶴亀松竹」の

第一句め。座五「富士の山」。文政版発句集、座五「富士の山」。

天下泰平

○松蔭に寝て喰ふ六十余州かな

右百六章 文虎
春甫 校

㊤ 七番日記(文化9・2)・株番・杖の竹

㊤ 七番日記、前書なし。中七以下「寝てくふ六十余州かな」。株番、

「題鶴亀松竹」の第三句。中七以下「寝てくふ六十よ州哉」。杖の

竹、前書「国家安全」。「松かげに寝てくふ六十余州哉」。

○朝菜つミ夕菜つミつゝつむとしの

つむりの雪ぞ野らにまがへる

㊤ 七番日記(文化13・3)

㊤ 七番日記、「朝なつみ」。「首の雪ぞ」。全集本「首」に「かうべ」

とルビ。

世の中は斯てもへけれぬるてふの

夢見てばかり身をすぐす哉

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息

㊤ 七番日記、「かくても」「すぐす」。志多良、「世中は」「かくても」。

句稿消息、「かくても」。梅塵本八番日記(文政2)、「かくても」「ぬ

るてふは」。

かつしかの栖立退く日、さし木のめ吹たるに

○古庵にのち住人よ花さかば

心さし木の桜とぞしれ

㊤ 文政版発句集

㊤ 七番日記(文化10・3)、「又住〔人〕よ露程の」。句稿消息、前書

「住なれし栖を出なんとして」。「のち住む人よ松の葉の花ぞ此花」

「のち住む人よ露ほどの桜とをしれ」。

○いさましの老木ざくらや翌の日に

倒るゝ迄も花は咲ぬる

㊤ 文政版発句集

○うつ波に千度しづみて浮草の

うき世並とて花や咲らむ

㊤ 文政版発句集

○夕立のまだ晴やらぬ木の問より

雫ながらに出る月かな

㊤ 文政版発句集

㊤ 文政句帳(文政6・10)、二句「まだ晴きらぬ」。だん袋、前書

「功成身退天道」。次の「里くを」に続けてこの一首を収める。第

二句「まだ晴きらぬ」。

息(別案)、上五「かくれ家や」。座五「鬼は外」。全集本発句篇、志多良を希杖本句集と誤る。

○餅花の木陰にてうちあはゝ哉

㊤ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息・おらが春・随齋筆記・稿本発句題叢

㊤ 七番日記、上五「餅花」の「の」。随齋筆記、上五「餅花のの」^(併)。発句題叢、上五「もち花の」。

○神の灯や餅を定木に餅をきる

㊤ 文政版発句集

㊤ 八番日記(文政4・12)、上五「さむしろや」。座五「餅を切」。自筆本句集、上五「山里や」。座五「餅を切る」。

○我門へ来さうにしたり配り餅

㊤ おらが春

㊤ おらが春、座五「配餅」。七番日記(文化10・閏11)・句稿消息、上五「我宿へ」。稿本発句題叢、上五「我門に」。自筆本句集、上五「我宿に」。

○わんといへさあいへ犬もとし忘れ

㊤ 七番日記(文化14・12)・自筆本句集

㊤ 七番日記・自筆本句集、座五「とし忘」。いくつやら覚えぬ上に年わすれ

㊤ 八番日記(文政2・10)

㊤ 中七以下「覚へぬ上^(と)にとし忘」。全集本、座五「年はずれ」と誤る。

長崎

○君が代やから人も来て年籠

㊤ 寛政句帳(寛政5)

㊤ 座五「年ごもり」。

雑

○おのづから頭が下るなる神路山

㊤ 文政句帳(文政5・1)・自筆本句集

㊤ 中七「頭が下るなる」は「頭が下るなり」の誤記。文政句帳、上五・中七「おのづ」から頭が下る也」。自筆本句集、中七以下「頭が下る也神ち山」。文政版発句集、中七「頭が下るなり」。八番日記(文政4・12)、中七以下「頭が下ル也梅の花」。

○掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦

㊤ 文政版発句集

㊤ 上五「掃溜へ」は「掃溜に」の誤りか。八番日記(文政3・9)、上五「掃溜^(溜)に」。

○月花や四十九年のむだ歩行

㊤ 七番日記(文化8・閏2)・我春集

㊤ 七番日記・我春集、座五「むだ歩き」。

㊤ 文政版発句集

○鶴の子の千代も一日なくなりぬ

㊤ 七番日記(文化9・1)・株番、座五「はやへりぬ」。

㊤ 七番日記(文化9・2)・株番

㊦ 座五「ありしよな」。

寒垢離の背中に竜の披露哉

㊧ 嘉永版発句集初出

㊨ 上五・中七「寒垢離に背中の竜の」誤記であろう。八番日記(文

政2・10||重出)、前書なし。上五・中七「寒垢離にせなかの竜の」。

おらが春・斗圍あて書簡(文政3・12・7付)、前書「両国橋」。上

五・中七「寒垢離にせなかの竜の」。

○叱らるゝ人うらやましとしの暮

㊩ 其日庵歳旦帳(寛政10)・自筆本句集

㊪ 自筆本句集、座五「とし」の「暮」。

○梟よのほゝん所かとしの暮

㊫ 七番日記(文化10・12)・一茶、麦之、阜鳥三吟歌仙(推定

文化10・12)・稿本発句題叢・自筆本句集・希杖本句集

㊬ 三吟歌仙、中七以下「のほゝんどころか年の暮」。自筆本句集、

座五「とし」の「暮」、希杖本句集、「ふくろふやのほほんどこか年

のくれ」。文政版発句集、座五「年の暮」。

○ともかくもあなた任せの年の暮

㊭ おらが春

㊮ おらが春、座五「としの暮」。文政版発句集、座五「としのくれ」。

○節季候や七尺去て小節季候

㊯ 七番日記(文化9・11)・句稿消息・稿本発句題叢・自筆本句集

㊺ 七番日記、上五「せき候や」。座五「小セキ候」。句稿消息・発句

題叢・自筆本句集・文政版発句集、座五「小せき候」。

町中をよい年をして節季候

㊻ 八番日記(文政2・10)

㊼ 座五「せつき候」。

○夕月や御煤の過し善光寺

㊽ 七番日記(文化9・11)

㊾ 句稿消息・文政版発句集、上五「名月や」とあるが、「夕月や」

の誤記であろう。

念々想続

○弥陀仏のみやげに年を拾ふかな

㊿ 指月あて書簡(文政7・1・6付)・自筆本句集

㊽ 書簡、前書「妻におくれて、又子にさへ捨られて、なげきの木末

晴るゝ間もなく年のくれけるに、娑婆の事の小むづかしく」。『みだ

仏のみやげにとしを拾ふ哉』。自筆本句集、前書なし。『みだ仏(みだぶつ)にみ

やげに年を拾哉』。文政版発句集、上五「みだ仏の」。座五「拾ふ

哉」。

節分

○福豆やふく梅干や歯にあはぬ

㊿ 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息

㊽ 七番日記、前書なし。中七「福梅ぼしや」。

○隠れ家や歯のない声で福は内

㊿ 志多良・句稿消息・自筆本句集

㊽ 志多良、前書「四日節分」(注、文化10・1)、上五・中七「かく

れ家や歯のない福(福)で」。句稿消息・文政版発句集、上五「かくれ家

や」。自筆本句集、上五「かくれ家や」。座五「福はうち」。句稿消

㊤ 八番日記(文政3・12)・斗圍あて書簡(文政3・12)

㊦ 八番日記、前書なし。上五「枉形りに」。座五「枕元」。書簡、前書「病中俳諧寺のていたらく」。上五「枉形に」。座五「まくら元」。全集本、文政版発句集、嘉永版発句集とも「枉」に「おくみ」とルビ。同八番日記、「枉」に「おくひ」とルビ。

雪舟引や屋根から呼る届状

㊧ だん袋・発句鈔追加

㊨ だん袋、前書「北陸道」。上五「雪車引や」。座五「とゞけ状」。発句鈔追加、前書「北陸道」。「雪車曳や屋根からよばるとゞけ状」。八番日記(文政4・10)、「そり引や家根から投るとゞけ状」。

○棧や凡人わざに雪舟を引

㊩ 八番日記(文政4・10)自筆本句集

㊪ 八番日記、座五「雪車を引」。自筆本句集、座五「ソリを引く」。文政版発句集、座五「雪舟を引く」。

○翌は又どこの月夜の里神楽

㊫ 自筆本句集

㊬ 茶翁聯句集(文化年中)、上五・中七、「この次はどこの月夜の」。

里並に藪の鍛冶屋も祭かな

㊭ 文化句帳(文化2・10)・発句鈔追加

㊮ 文化句帳、前書「閑田 上毛皿割男」。中七以下「藪のかぢ屋も祭哉」。発句鈔追加、座五「祭り哉」。稿本発句題叢、「町並〔に〕藪のかぢやも祭哉」。

○行人を皿で招くや薬喰ひ

㊯ 文政句帳(文政5・12)・自筆本句集

㊰ 文政句帳・自筆本句集、中七以下「皿でまねくや薬喰」。発句集、座五「薬喰」。

五十にて鰻の味をしる夜かな

㊱ 稿本発句題叢

㊲ 上五「五十にして」。発句鈔追加、「五十にして鰻の喰味を知夜哉」。

○鰻汁やもやひ世帯の惣軒

㊳ 文政句帳(文政8・10)

とら鰻の顔をつん出す葉陰かな

㊴ 享和句帳(享和3・10)・稿本発句題叢・発句鈔追加

㊵ 享和句帳、座五「葉かげ哉」。発句題叢、座五「葉陰哉」。発句鈔追加、上五「虎鰻の」。

○出始を祝ふてたゞく瓢かな

㊶ 七番日記(文化10・11)

㊷ 中七以下「いはふてたゞく瓢哉」。

大寒や八月ほしきまつの月

㊸ 稿本発句題叢・発句鈔追加

㊹ 発句題叢・発句鈔追加、座五「松の月」。

○一夜さは出来心なり寒念仏

㊺ 八番日記(文政2・11)・自筆本句集

㊻ 八番日記、上五・中七「一夜〔さ〕は出来心也」。自筆本句集、中七「出来心也」。

○寒念仏さては貴殿で有しよな

㊼ 文政版発句集

初ゆきや縁から落し上草履

㊤ 八番日記(文政2・10)

㊦ 座五「止草履」。

はつ雪や古郷見ゆる壁の穴

㊤ 文化句帳(文化1・11)・稿本発句題叢・発句鈔追加

㊦ 文化句帳、上五「初雪や」。発句鈔追加、中七「ふる里見ゆる」。

○初ゆきや鳥も構はぬ女郎花

㊤ 句安奇禹度(文化7)

㊦ 文政版発句集、上五「初雪や」。

石の上の住居のこゝろせはしさよ

○雪散るやきのふは見えぬ借家札

㊤ 三韓人 (文化11)

㊦ 三韓人、上五「雪ちるや」。文政版発句集、上五・中七「雪ちる

やきのふは見^(え)へぬ」。志多良・句稿消息、前書なし。「雪ちるやきの

ふは見^(え)へぬ明家札」。自筆本句集、前書「石上の住居は」。「雪ちる

やきのふは見^(え)へぬ明家札」。

○来る人が道つけるなり門の雪

㊤ 文政句帳(文政7・冬)・文路あて書簡(文政7・11・10付)・

士英あて書簡(文政7・12・18付)

㊦ 文政句帳、中七「道つける也」。文政版発句集、上五「くる人が」。

文路あて書簡、前書「草庵」。中七「道つける也」。士英あて書簡、

前書「朝寝坊図」。中七「道つける也」。

○ちとたらぬ僕や隣の雪もはく

㊤ 文政句帳(文政7・冬)

○むまさうな雪がふうはりくと

㊤ 文政版発句集

㊦ 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息・希杖本句集、中七以下「雪

がふうはりふはり哉」。随齋筆紀「うまさうな雪やふふはりくと」。

自筆本句集、「うまさうな雪やふふはりくと」。

○ほちやくと雪にくるまる在所哉

㊤ 句稿消息

㊦ 七番日記(文化9・11)、上五「ほちくと」。

○犬どもがよけてくれけり雪の道

㊤ 自筆本句集

㊦ 文政句帳(文政5・閏1)、頭書「狗子有仏生」。中七「よけ〔て〕

居る也」。

○雪ちるや脇から見たら栄耀駕

㊤ 一茶翁終焉記

㊦ 全集本・嘉永版発句集、中七「脇から見たり」と翻刻。

十二月廿四日古郷に入

○是がまあ終の栖か雪五尺

㊤ 七番日記(文化9・11)・句稿消息・自筆本句集・一茶翁終

焉記

㊦ 七番日記、前書なし。中七「つひの栖か」。句稿消息、前書「十二

月廿四日、古郷二入」。中七「つひの栖か」。自筆本句集、前書「柏

原を家所定て」。中七「つひの栖か」。終焉記、中七「終の住家か」。

一茶病中のていたらく

○枉^{まが}なりに吹込雪や枕もと

「欠をつかんで」。

○御地藏と日向ぼこして鳴千鳥

㊦ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息(重出)・自筆本句集

㊦ 志多良・自筆本句集、中七「日なたぼこして」。

○おちつきにちつと寝て見る小鴨哉

㊦ 句稿消息・自筆本句集

㊦ 自筆本句集、上五「おちつ〔き〕に」。七番日記(文化10・9、10月部)、中七「一寸寝て見る」「先は寝て見る」と併記。

○汝等も福は待かよ浮寝鳥

㊦ 文政版発句集

㊦ 七番日記(文化13・閏8)、中七「福は待かよ」。同(13・12)・自筆本句集、中七「福を待かよ」。

鶯や黄色な声で親を呼

㊦ 七番日記(文化7・10)文化三十八年句日記写(文化7)・稿本発句題叢・自筆本句集・希杖本句集

㊦ 七番日記・句日記写・自筆本句集、座五「親をよぶ」。発句題叢、前書「笹鳴」。座五「親をよぶ」。発句鈔追加、上五・中七「うぐいすやちつさな声で」。

○みそさどいちよといふても日が暮る

㊦ 文政版発句集

㊦ 中七「ちよといふても」は、「ちつといふても」の誤記か。文化句帳(文化1・11)・稿本発句題叢、中七「ちつといふても」。

こつそりとしてかせぐ也みそさどい

㊦ 八番日記(文政2・10)

○輝をかくして母の夜伽かな

㊦ 文政版発句集

○門口へ来て氷なり三井の鐘

㊦ 七番日記(文化8・10)

㊦ 中七「来て氷也」。我春集、上五・中七「門口に来て氷る也」。文政版発句集、上五・中七「門口に来て氷るなり」。

○一さんに飛で火に入あられかな

㊦ 自筆本句集

㊦ 自筆本句集、中七「とんで火に入」。文政版発句集、中七以下「とんで火に入あられ哉」。文政句帳(文政7・12)、「あばら家〔に〕とんで火に入あられ哉」。だん袋、「朝市の火入にたまる霰かな」。

○盛任がしやつ面たよくあられ哉

㊦ 句稿消息

㊦ 七番日記(文化10・10)、中七「横面たよく」。自筆本句集、「弁慶の横面投る霰哉」。

○初雪や俵の上の小行灯

㊦ ほしなうり(文化9)

○はつ雪や今行里の見えて降

㊦ 文政版発句集

㊦ 中七以下「今行く里の見へて降」。

○初雪やこきつかはるゝ立仏

㊦ 文政句帳(文政5・閏1、同6・11||重出)

㊦ 文政句帳、上五「はつ雪や」。

㊦ 嘉永版発句集初出

㊦ 全集本発句篇、この句脱。

○加茂の水吉野紙子とほだへけり^(え)

㊦ 七番日記(文化10・11)・句稿消息

㊦ 座五「ほだへたり」の誤りであろう。七番日記、上五「加茂(の)水」。座五「ほだへたり」。句稿消息、座五「ほだへたり」。発句鈔

追加、座五「ほこりけり」。

大坂八軒家

○船が着て候とはぐふとんかな

㊦ 自筆本句集

㊦ 自筆本句集・文政版発句集、座五「ふとん哉」。七番日記(文化

10・閏11)、「舟が着て候」と「めくるふとん哉」(全集本、舟に着て「又」候(ぞろ)めくるふとん哉)。

○祐成がふとん引はく笑ひかな

㊦ 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息・自筆本句集

㊦ 自筆本句集、前書「大磯」。

○今少雁を聞とてふとんかな

㊦ 七番日記(文化10・閏11)・自筆本句集

㊦ 七番日記・自筆本句集、座五「ふとん哉」。

○漏どのおそろしといふふすま哉

㊦ 句稿消息

㊦ 句稿消息、上五「漏ルどのが」。座五「衾哉」。文政版発句集、座

五「衾哉」。「七番日記(文化10・10)」、「漏殿がおそろしとかぶる衾哉」。志多良、「漏ルどのおそろしとかぶる衾哉」。自筆本句集、

「漏殿がおそろしとかぶる衾哉」。

焼穴の日／＼にふえる紙衣かな

㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 「やけ穴の日々ふいる紙子哉」。

○三日月と肩をならべて網代守

㊦ 七番日記(文化10・12)・句稿消息

㊦ 七番日記、上五「三ヶ月と」。座五「あじろ守」。句稿消息、上五

「三ヶ月と」。

○網代守天窓で揖を取にけり

㊦ 七番日記(文化12・10)・自筆本句集

㊦ 七番日記、中七以下「天窓でかちをとりにけり」。自筆本句集・

文政版発句集、座五「とりにけり」。

さきつとしの大なひに、鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺は
ゆりこみ沼とかはりぬ。さすがの名どころも事ごとくうらむが如
くなりけり。

○象潟の欠を擱で鳴千鳥

㊦ 七番日記(文化10・9、10月部)・句稿消息・あとまつり・随

斎筆記・自筆本句集

㊦ 七番日記、前書「鳥海山は海を埋、干満寺は地底に入」。中七

「(欠)をかぞへて」「を擱んで」「にすがりて」と併記。句稿消息、

前書「鳥海山は崩れて海を埋め、干満寺はゆり込て名残だになし。

さすがの風色もいよ／＼うらむがごとく也」。中七「(欠)をかぞへて」「を擱んで」「にすがりて」と併記。あとまつり、前文末尾「まことにうらむがごとくなりけり」。自筆本句集、前書「覽古」。中七

㊦ 自筆本句集、中七「うしろ向けり」。文政版発句集、中七「うしろむけけり」。八番日記(文政2・10)、中七「せなか向けり」。

○櫓の火や目出度御代の顔と顔

㊦ 文化句帳(文化1・11)・稿本発句題叢

檜木原に泊りて

埋火に桂の鷗聞えけり

㊦ 文化句帳(文化2・10)・稿本発句題叢

旅

○斯う寝るも我火燧では無りけり

㊦ 花の跡(文政1)

㊦ 花の跡・文政版発句集、座五「なかりけり」。

嵯峨山

○はやぐと誰冬ごもる細けぶり

㊦ 文化句帳(文化3・11)・自筆本句集・希杖本句集

㊦ 文化句帳、前書なし。自筆本句集、前書「さが山」。希杖本、前

書なし。中七「誰が冬籠る」。

帰庵

○留主札もそれなりにして冬籠

㊦ 自筆本句集

小人間居成不善二

○冬籠悪もの喰のつりけり

㊦ 八番日記(文政4・11)・ほまち畑・自筆本句集

㊦ 八番日記、前書なし。中七「あく物ひくいひの」。ほまち畑、上五・中

七「冬ごもり悪くもの喰の」。自筆本句集、中七「悪物喰の」。八番

日記(文政2・12)、前書なし。中七以下「悪ひもの」喰が上りけり。同、前書なし。「冬ごもりいか物喰を習ひへけり」。おらが春、中七以下「悪く物喰を習けり」。

○さし捨し柳の陰をふゆ籠

㊦ 志多良・句稿消息・自筆本句集

㊦ 志多良・句稿消息・自筆本句集、座五「冬籠」。句稿消息、座五

「夕籠」としたものが見えるが、「夕」は「冬」の誤記であろう。七

番日記(文化10・10)、「指捨指し柳の下を冬ごもり」。同(文化11・

1)、座五「住居哉」。

冬籠その夜に聞や山の雨

㊦ 文化句帳(文化1・10)・稿本発句題叢

㊦ 文化句帳、中七「其夜に聞くや」。発句題叢、上五・中七「冬籠る

其夜ニきくや」。発句鈔追加、上五・中七「冬ごもり其夜にきくや」。

○眠りやう鷺に習はん冬ごもり

㊦ 七番日記(文化10・9、10の部)・自筆本句集

㊦ 七番日記、「眠り様鷺に習ん冬籠り」。自筆本句集、「眠り様鷺に

習はん冬籠」。文政版発句集、「眠り様鷺に習ん冬ごもり」。

○西の木と聞てたのむや冬籠

㊦ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息・自筆本句集

○ばせを塚先ひ拌ひむなり初紙子

㊦ 自筆本句集

㊦ 自筆本句集、「芭蕉塚先拌むひはつ紙子」。文政版発句集、座五

「はつ紙子」。七番日記(文化12・10)、「御仏御に先備先たる布子哉」。

ほか来てもどなたぞよいふ紙子哉

木瓜の株苳つくされて帰花

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 八番日記(文政2・10)、「木瓜藪や切尽されて帰り花」「木瓜藪や刈尽されて帰り花」。

○大根引大根で道を教へけり

㊤ 七番日記(文化11・12)・自筆本句集

野大根引すてられもせざりけり

㊤ 八番日記(文政2・10)

㊤ 中七以下「引すたられもせざりけり」。梅塵本八番日記(文政2)、中七以下「引捨られもせざりけり」。「野大根」は、「春大根」「三月大根」などとともに正しくは春。

鶴遊べ葛飾大根今やひく

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 文化句帳(文化2・10)、中七以下「吉野^(の)大根今や引」。千題集、中七「葛西の大根」。

○雉子なども粗鳴にけり大根引

㊤ 文化三〇八年旬日記写(文化7・10)・文政版発句集

㊤ 旬日記写、上五「雉なども」。七番日記(文化7・10)、上五・中七「雉など粗鳴にけり」。

尼寺や二人りかゝつて大根引

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 八番日記(文政2・10)、上五・中七「尼達や二人かゝつて」。

○鳴雀其大根も今引ぞ

㊤ 稿本発句題叢・自筆本句集

㊤ 自筆本句集、中七「其」大根も」。

○炉開きやあつらへ通り夜の雨

㊤ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息

㊤ 自筆本句集、中七「拵へ通り」。

炭竈の空の小隅も浮世哉

㊤ 七番日記(文化7・10)

㊤ 七番日記、座五「うき世哉」。発句鈔追加、中七「穴の小隅の」。栗本雑記、中七「穴の小隅も」。

○朝晴にばち／＼炭の機嫌かな

㊤ 七番日記(文化10・11)・句稿消息・自筆本句集

㊤ 七番日記・句稿消息・自筆本句集・文政版発句集、座五「きげん哉」。

炭の火や齡のへるもあの通り

㊤ 稿本発句題叢・自筆本句集・発句鈔追加

㊤ 発句題叢、上五「炭の火〔や〕」。

○分てやる隣もあれなおこり炭

㊤ 七番日記(文化10・10)・句稿消息

○炭の火に峰の松風通ひけり

㊤ 八番日記(文政3・2)・自筆本句集・発句鈔追加

○炭の火に月落烏啼にけり

㊤ 文政句帳(文政5・11)・自筆本句集

㊤ 自筆本句集、中七「月おち烏」。

○槽の火に後ろむけけり最明寺

㊤ 自筆本句集

㊥ 自筆本句集

㊦ 中七以下「垣にゆひ込むつくば山」。

㊧ 七番日記(文化10・9、10の部)、中七以下「垣にかひ込角田川」。

○嵯峨村と名乗顔なり枇杷の花

㊨ 句稿消息

㊩ 中七以下「名乗り顔也枇杷花」。

○落葉して日向に酔し小僧かな

㊪ 七番日記(文化14・10)・自筆本句集・希杖本句集

㊫ 七番日記・希杖本、「おち葉して日なたに酔し小僧哉」。自筆本句集、上五「おち葉して」。座五「小僧哉」。文政版発句集、上五「おち葉して」。

○楢の葉の朝から散や豆ふ桶

㊬ 板本発句題叢・発句鈔追加

㊭ 発句鈔追加、中七「朝からちるや」。文化句帳(文化1・9)、「楢〔の〕葉の朝からちるやとうふどね」。稿本発句題叢、中七以下「朝からちるや豆歎槽」。

○掛がねのさても淋しや散木葉

㊮ 板本発句題叢・発句鈔追加

㊯ 発句鈔追加、上五・中七「かけがねのさてもさびしや」。文化句帳(文化2・10)、「かけがねのさても錆しよちる木葉」。

○落葉して三月頃の垣根かな

㊰ 文政版発句集

㊱ 中七以下「三月ごろの垣根哉」。

○鶯の口すぎに来る落葉かな

㊲ 九日集(文政8)

門畑や猫をぢらして飛木葉

㊳ 八番日記(文政2・9)

㊴ 中七以下、「猫をじらしてとぶ木の葉」。梅塵本八番日記(文政2)、中七以下「猫をじやらして飛木の葉」。

○花細委地無人収

○おもひ草思はぬ草も枯にけり

㊵ 梅塵本八番日記(文政3)・自筆本句集

㊶ 梅塵本、中七「思はぬ草も」。文政版発句集、上五「思ひ草」。風間本八番日記(文政3・7)、前書「花の細委地無人収」。上五・中七「忍草忍わぬ草も」。同(2・7)、前書なし。上五・中七「忍草しのばぬ草も」。同(2・9)、前書なし。「忍草忍ばぬ草も枯野哉」。

○枯芒昔婆々鬼あつたとき

㊷ 七番日記(文化14・8、10)重出)・自筆本句集

○作らるゝ菊から先へ枯にけり

㊸ 稿本発句題叢・発句鈔追加

㊹ 発句鈔追加、上五「つくらるゝ」。座五「かれにけり」。

○女郎花なんの因果で枯かぬる

㊺ 文政版発句集

㊻ 七番日記(文化13・閏8)、中七以下「何の因果に枯かぬる」。同(文化13・12)、中七以下「何の因果に枯かぬる」。自筆本句集、中七以下「何の因果に枯かぬる」。希杖本句集、中七以下「何〔の〕因果で枯かぬる」。希杖本句集、中七以下「何の因果で枯かぬる」。

㊤ 八番日記、上五「年かさを」。座五「寒さ哉」。書簡、上五「年かさを」。座五「寒かな」。自筆本句集、座五「寒哉」。発句鈔追加、座五「寒かな」。

上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢の結び所とす。きのふあたり住倦たる人のなせる業にや、垣の薜のそれなりに枯て、其実ほろ／＼落たり。いく人の涙をかけし果ともおもはれて、秋に立増りて哀れなり。又門口に二尺計なる土をならして菜のやうなるもの蒔置けるが、雪の片隅にはや／＼と青みぬ。是必愛度春を迎へて餅いはふべき且の料ならんか。壁は七福即生の守り張重て盗人の輩を防ぎ、竈は大根注連といふものを引はへて回録を逃んとす。荒神松はいまだ野の色ながら横さまにこけたり。皆たゞ行末いつ迄か住果んあら増ぞと見ゆるも、今は雲にや迹をくらしけん、山にや影をかくしけん。すべていづこかつひの栖ならん。かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれん事をおもふのみ。

○身に添ふや前の主の寒さ迄

㊤ 文政版発句集

㊤ 座五「寒迄」。

おのが姿にいふ

ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 七番日記(文化15・12)、前書「自像」。座五「天窓哉」。中七以下「見てさへも不形な天窓哉」(別案)。「見てさへ寒し影法師」(別案)。

文化六年十二月十五日

賀旧家大川氏

○木枯や千代に八千代の門榎

㊤ 自筆本句集

㊤ 前書「大川氏賀旧家」。七番日記(文化8・12)、前書なし。上五「木がらしや」。座五「大榎」。文政版発句集、「文化六年十二月十五日」は、「身に添ふや」に付いていた。それを嘉永版発句集に増補のとき、「ひいき目」の句を「身に添ふや」の次に補入。そのため、「木枯や」の前書と一緒にしまったのである。全集本発句篇の注に、「座五「門構」と誤る。

今日も／＼只木枯の菜屑かな

㊤ 七番日記(文化7・10)・稿本発句題叢・発句鈔追加

㊤ 七番日記・発句題叢、「けふも／＼只木がらしの菜屑哉」。発句鈔追加、「けふも／＼唯風の菜屑哉」。

○木枯や雀も口につかはるゝ

㊤ 文化三々八年句帳写(文化7・10)

㊤ 句帳写・文政版発句集、上五「木がらしや」。

木枯や行拔路次の上総山

㊤ 八番日記(文政2・10)

㊤ 前書「芝浦」。上五「木がらしや」。梅塵本八番日記(文政2)、前書「芝浦」。上五・中七「凧や行ぬけ道の」。

○水仙や大仕合のきり／＼

㊤ 七番日記(文化10・11)・句稿消息・稿本発句題叢・自筆本句集

○水仙や垣に結こむ筑波山

㊦ 自筆本句集

㊦ 中七以下「餠で餅くふはなし哉」。七番日記(文化12・10)、中七以下「餠でもちくふ夜也けり」。発句鈔追加、中七以下「餠で餅くふ夜なりけり」。

春日山

○棹鹿やえひしてなめる今朝の霜

㊦ 八番日記(文政2・9)・おらが春・斗圍あて書簡(文政3・12・7付)

㊦ 八番日記・おらが春・書簡、前書なし。上五「さをしかや」。座五「けさの霜」。

人足も霜がれ時や王子道

㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 座五「王子みち」。

○霞まで生やうものか霜の鐘

㊦ 文政版発句集

中仙道

霜がれやおれを見掛けて鉦叩く

㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 「霜がれ「や」おれを見かけて鉦たたく」。梅塵本八番日記(文政2)、中七以下「おれを見かけて証扣」。

橋上乞食

○母親を霜よけにして寝た子かな

㊦ 八番日記(文政4・1)・自筆本句集

㊦ 八番日記・自筆本句集・文政版発句集、座五「寝た子哉」。

小松菜の一文把や今朝の霜

㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 中七以下「一文東やけさの霜」。

追分

○霜がれや鍋のすみかく小傾城

㊦ 八番日記(文政4・11)・自筆本句集

㊦ 八番日記、前書なし。中七「鍋の炭かく」。自筆本句集、中七「鍋の炭かく」。

○霜がれや新吉原も小藪並

㊦ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢

一人旅

○次の間の灯で膳につく寒かな

㊦ 自筆本句集

㊦ 中七以下「灯「で」膳につく寒哉」。

一文に一ツ鉦打寒さかな

㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 中七以下「鉦うつ寒哉」

寒さにもなれて歩行や信濃山

㊦ 嘉永版発句集初出

㊦ 八番日記(文政4・12)、中七以下「馴て歩くやしの道」。梅塵本八番日記(文政4)、中七以下「馴て歩行くや鹿の道」。

○としかさをうらやまれたる寒さかな

㊦ 八番日記(文政4・12)・ト英あて書簡(文政4・12・19付)・

自筆本句集・発句鈔追加

○菜畑を通してくれる十夜哉

㊤ 八番日記(文政2・11)・おらが春・自筆本句集

㊤ 八番日記・おらが春・自筆本句集、上五「菜畑を」。全集本・自筆句集、中七「通してくれ」た」。八番日記(2・11)、上五「^同塀合を」。発句鈔追加、中七「通してもらふ」。

御十夜は巾着切も月夜かな

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 八番日記(文政2・6)、座五「月夜也」。

○もろくの愚者も月夜の十夜哉

㊤ 八番日記(文政3・9)・稿本発句題叢・自筆本句集

㊤ 発句題叢、中七以下「愚者も月よの十夜かな」。自筆本句集、上五「もろく」の「の」。文化句帳(文化3・10)、中七「愚者も月見る」。自筆本句集、中七「愚者も月見の」(別案)。

○鳶ひよろひよる神の御立げな

㊤ 七番日記(文化12・10)・自筆本句集

㊤ 七番日記、上五・中七「鳶ヒヨロヒ、ヨロ神の」。文政版発句集、上五・中七「鳶ひよろひよる神の」。魚淵あて書簡(文化12・10・7付)、上五・中七「鳶ひよろひよる神の」。ありのまゝ、「鳶ひよろひよる神も御立やら」。発句鈔追加、西歌仙、中七「ひよる神も」。発句類題集、座五「お立やら」。

我宿の貧乏神も御供せよ

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・発句類題集

㊤ 発句題叢・発句鈔追加、前書「神送」。

桃青霊社

○御宝前にかけて奉る初しぐれ

㊤ あとまつり(文化13)

㊤ あとまつり、前書「法楽」。座五「はつしぐれ」。この句を立句として一茶・魚淵両吟歌仙。自筆本句集、「御宝前かけ奉る時雨哉」。

○ばせを忌やこしもまめで旅風

㊤ 文政版発句集

○義仲寺へ急候はつしぐれ

㊤ しぐれ会(寛政7)

㊤ 文政版発句集、座五「初しぐれ」。

○ばせを忌や昼から錠の明く庵

㊤ 文政句帳(文政8・11)

○ばせを忌に丸い天窓の披露かな

㊤ 文政版発句集

㊤ 座五「披露哉」。だん袋、中七以下「執筆の天窓披露哉」。八番日記(文政4・10)、「芭蕉忌の主あたまの披露哉」。梅塵本八番日記(文政4)、中七以下「坊主天窓の披露哉」。発句鈔追加、前書「一茶剃髪」。中七以下「坊主天窓の披露哉」。

降雨も小はるなりけり知恩院

㊤ 文化句帳(文化1・9)・千題集

㊤ 文化句帳、上五・中七「ふる雨も小春也けり」。

棒先の紙もひらく小春かな

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 八番日記(文政2・10)、中七以下「紙のひらく小春哉」。

○御取越し飴で餅喰ふ咄し哉

㊤ 文化句帳・発句題叢、上五・中七「しぐれねば夜も明ぬ也」。発句鈔追加、上五・中七「しぐれねば夜は明ぬなり」。

○目ざす敵は鶴頭よはつ時雨

㊤ 文政版発句集

㊤ 七番日記(文化10・9、10の部)・句稿消息、座五「横時雨」。句稿消息(別案)、「敵は鶏頭か横時雨」。座五「はつ時雨」は、文政版発句集の「はつしぐれ」によったものだが、座五を「はつしぐれ」とする遺稿もあって、誤りとは断じがたい。

子を負ふて川越す狙や一時雨

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

㊤ 梅塵本、中七「川越猿や」。風間本八番日記(文政2・9)、上五・中七「子を負「て」川越す旅や」。

時雨ゝや親椀叩く啞乞食

㊤ 八番日記(文政2・10)

㊤ 中七「親椀たゝく」。

旅

○しぐるゝや家にしあらば初しぐれ

㊤ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息・自筆本句集

㊤ 七番日記・志多良・自筆本句集、前書なし。座五「初時雨」。句稿消息、座五「初時雨」。

青柴や秤にかゝるはつ時雨

㊤ 七番日記(文化8・10)・我春集

桑名

○蛤のつひの煙りや夕しぐれ

㊤ 七番日記(文化11・11)・自筆本句集

㊤ 七番日記・自筆本句集、中七以下「つひのけぶりや夕時雨」。文政版発句集、中七「つひのけぶりや」。

途中にて素玩に逢ふ

○しぐれ込め角から二軒目の庵

㊤ 七番日記(文化12・11)・自筆本句集

㊤ 七番日記、前書「芭蕉塚」。

○夜しぐれやから呼されしあんま坊

㊤ 自筆本句集

㊤ 上五「夜時雨や」。八番日記(文政2・10)・おらが春、「木がらしやから呼されし按摩坊」。

○人の為しぐれておはす仏かな

㊤ 七番日記(文化10・9)・自筆本句集

㊤ 七番日記、上五「人のため」。座五「仏哉」。自筆本句集、「人のため時雨ておはす仏哉」。七番日記(文化7・10)、上五・中七「誰ためにシグれておはす」。八番日記(文政4・12)、上五・中七「身代に時雨ておわす」。

悼

○鳴からすこんなしぐれのあらんとて

㊤ 文政版発句集

盗人おのが古郷に隠れて縛られしに

○業の鳥罾を巡るやむら時雨

㊤ おらが春・方言雑集・文政九・十年句帳写

㊤ 句帳写、中七「罾を廻るや」。

【研究ノート】

嘉永版『俳一茶発句集』入集の句 (完)

黄色 瑞華

凡例

一 一行めに、嘉永版『俳一茶発句集』をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」(文政版『一茶発句集』)にあるものは、句頭に○印を付した。

二 二行め以下に、㊸として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって注した。

三 句形等に嘉永版発句集と異なるものがある場合、㊸以下にそれを示した。

四 嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』(叢書本)、『希杖本発句集』(荻原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岩波書店)、『一茶発句鈔追加』(栗生純夫『一茶新考』西沢書店)などがそれである。

俳一茶発句集 下 (承前)

冬の部

○やあしばらく蟬だまれ初しぐれ

㊸ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息
 ㊸ 七番日記・志多良・句稿消息、座五「初時雨」。
 善光寺御堂庭乞食

重箱の銭四五文や夕しぐれ

㊸ 八番日記(文政2・10)・おらが春

㊸ 八番日記、前書「堂庭乞食」。座五「夕時雨」。おらが春、前書「善光寺門前憐乞食」。座五「夕時雨」。

○牡丹餅の来べき空なり初時雨

㊸ 七番日記(文化7・10)・木槿集

雀踏む程は菜もありはつ時雨

㊸ 稿本発句題叢・発句鈔追加

㊸ 発句題叢、中七「程は菜も有」。

○初しぐれ夕飯買に出たりけり

㊸ 真蹟

時雨ねば夜も明ぬなり片山家

㊸ 文化句帳(文化1・10)・稿本発句題叢・発句鈔追加・吹寄集